九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 三人の男と一人の女

沈，従文
九州大学大学院言語文化研究院 ： 助教授 ： 中国文学

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院 ： 助教授 ： 中国文学

https://hdl.handle.net/2324/7615

出版情報：湘西 ： 沈従文研究. 5, pp.26-51, 2003-10-01. 湘西刊行会
バージョン：
権利関係：

『湘西』第5号　2003年10月

# 三人の男と一人の女

沈　従文

（中里見敬・2002年度後期「アジア言語文化論II／IV」受講生訳）

**【解題】**

本訳稿は、沈従文(1902-1988)の小説「三個男子和一個女人」[1]を訳出したものである。この作品の初めての日本語訳である。使用したテキストは、以下のとおり。

1.沈從文「三個男子和一個女人」（『文藝月刊』第一巻第三期，南京：中國文藝社，1930.10，pp.15-33）

2.沈從文「三個男子和一個女人」（沈從文『新與舊』上海：良友圖書印刷公司〔趙家璧編輯《良友文學叢書》第32種〕，1936，pp.55-102）

3.沈从文「三个男人和一个女人」（『沈从文小说选』长沙：湖南人民出版社，1981，pp. 138-162）

4.沈从文「三个男子和一个女人」（凌宇编『沈从文小说选』北京：人民文学出版社，1982，pp. 223-245）

5.沈从文「三个男人和一个女人」（『沈从文文集』第六巻（海外版），香港：生活・读书・新知三联书店香港分店；广州：花城出版社，联合编辑出版，1983, pp. 25-49）

6.沈从文「三个男子和一个女人」（『沈从文全集』第八巻，太原：北岳文艺出版社，2002, pp. 11-35）

テキストに関しては、雑誌初出(1)と単行本(2)の大きく二系統に分けることができる。

[1]雑誌初出の末尾には、「十九年八月廿四日」と記されており、1930年8月24日に原稿が完成したことがわかる。しかし、その後テキストに大幅な改訂が加えられたことは、以下の解題に記したとおりである。

単行本に収めるにあたって、作者が大幅に手を加えたとみられ、この両者の異同はきわめて大きい。また、最新の全集本(6)が雑誌初出(1)によるのに対して、湖南人民版小説選(3)および文集本(5)は単行本(2)によっている[II]。人民文学版小説選(4)は基本的には単行本(2)によるものの、無数の異同が見られる。なお、人民网の運営するウェッブサイト「人民书城」[III]に収められた電子テキスト「《游目集》：三个男人和一个女人」[IV]は、文集本(5)と一致している。

翻訳にあたってはすべてのテキストを参照したが、最終的な方針として単行本(2)を底本とし、異本はいっさい採用しなかった。そのためとくに雑誌初出ならびに全集本とは、相当に異なることをお断りしておく。

本稿は、2002年度後期に九州大学大学院比較社会文化学府で開講した「アジア言語文化論II／IV」の授業における、講読の成果である。受講生は、杜昱、中尾健一郎、马丛慧、Monica Hamciucの四名である。訳稿作成にあたって、中里見が語句や文体の統一・整理をおこなった。翻訳に際しては、原文の構造を大きくそこなわない翻訳に努めると同時に、日本語としてもリーダブルであることを心がけた。誤訳や日本語として読みにくい箇所をご教示いただければ、ウェッブページ上で正誤表として更新していきたいと思う。

連絡先：　naka@flc.kyushu-u.ac.jp

ウェッブページ：　http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~naka/index.html

なお、齊藤大紀、福家道信両先生より草稿に対して貴重なご教示をいただき、最終稿にいかすことができた。厚くお礼申し上げる。

（以上、中里見記）

---

[II]湖南人民版小説選(3)と文集本(5)とでは、前者のほうがより単行本(2)に近い。

[III]http://www.booker.com.cn

[IV]http://www.booker.com.cn/gb/paper44/1/class004400005/hwz124010.htm

雨降りのおかげで、友人から雨降りの物語をするようせがまれた。これはその中で最も平凡な一つである。それほど感動的でないとしたら、あまりにも真実であるからだ。美しいものは何でもたいてい真実ではないということを、私たちは知っている。空の虹と眠っているときの夢が、ちょうどその好例である。

軍隊が移動するとき、必ず雨が降ることの理由を知っている人はいない。

私たちは自分ではその理由がわからない。連隊の物資担当官ならあるいはそのことを知っているかもしれない。雨が降らないときには、移動のために使う草鞋の量は少ないが、雨が降れば草鞋の消費が多くなるからだ。降雨時の移動は、物資担当者にとって都合がよいのかもしれない。そういったことは私にはよくわからないが、慣例は非常に複雑で、連隊長でさえ――彼はブーツを履いているから――はっきりわからないのだ。しかし、出発はいつも雨降りと深く結びついていた。それが今年になってからの私たちのめぐりあわせになっていた。

大雨の中で戦いを行うのにも人が必要なのだから、雨の中の移動くらいで、私たちはもちろんこれ以上の不平を言うべきではないのだ。雨は降ったりやんだりするが、部隊の防水カッパは完璧であった。私たちの行く先で設営を行う副官は、雨降りを口実にして、私たちの食糧の準備を怠るようなことはけっしてなかった。私たちの大隊長は馬に乗って、雨で全身びしょぬれになっても、マラリアにかかる心配などしなかった。私たちが雨の中、竹林をとおりぬけたり、川辺の茅ぶき小屋で渡し船を待ったりするとき、雨降りのおかげで、すべての景色がいつもよりはるかに美しく見えるのだった。

雨が降ると、やたらに多くのぬかるみができる。だが、つるつる滑りながら長い道のりを歩いていると、それほど大変には感じなくなる。私たちは雨降りのおかげで、毎日歩く距離を短縮することができた。さらに私たちはトイレのときに、口実を作って若い女性のいる家に行き、だじゃれや冗談を言ったりして、ついでにシュロの服を何枚かもらって、足に巻きつけた。私たちは雨降りのおかげでいくらか自由気ままな気分になり、大隊長と同じたらいで足を洗った。一兵士が大隊長と同じたらいで足を洗う機会を得るといった軍紀、風紀を超えた自由は、私たちの時代にはなかなかありえないことだったのだ！

隊列は四日間歩いて、目的の場所へ到着した。天気はおもしろいもので、隊列が目的地に着くと、突然晴れて太陽が出てきた。太陽がわざと私たちにたてついたのだと思って、きっとたくさんの人がそれを可笑しく思ったことだろう。まあ

よかろう、それは私たちにはどうにもしようがないことだ。私たちは防衛補充のためにここへ移動してきたのだった。もともと駐屯していた軍隊はとっくにいなくなったので、部隊を移動して欠をうめることになり、彼らがやっていた退屈な仕事は、私たちが引き続きやらねばならなくなった。

夕焼けが空を赤く染める時分に、私たちの大隊はここに駐留することになった。もう一つの大隊は、今晩はここに駐留するが、翌日には二十五キロ離れた村に移動しなければならない。明日、移動する兵士たちは、その時分にはすでにそれぞれ宿屋や民家に駐屯していたが、私たちはあちらこちら泊まる場所を探していた。それぞれの部隊はすでに割り振りが決まっており、私たちの隊は楊家の祠に泊まることになっていた。しかし、私たちの中隊の者は誰も楊家の祠の方角がわからず、街中でよその中隊の兵士を適当につかまえては尋ねるほかなかった。

実は、楊家の祠は二つあって、私たちが長いことかかって探しあてたのは、ちがうところのようだった。その祠はあまりにも小さくておんぼろで、中は荒れはてていた。中隊長は少し怒り、彼の高貴な足も機嫌をそこねて、これ以上歩こうとはしなかった。ここは誰もいないから、ひとまず休むことにして、あとで誰かを聞きに行かせよう、と彼は言った。私たちはみな丸一日長い道のりを歩いてきた。そのうえすでに多くの兵士が民家で休み、大きな木のたらいで足を洗い、干し魚をもっていそいそと炊事場へ行くのを、私たちは目にしていた。くたびれて腹ぺこだが、みな落ち着き先が見つかり、一件落着したようだった。それなのに私たちだけ、まだ街の中をうろうろして、まるでよるべのないルンペンのようだ。ようやく足を休める場所が見つかったことだし、時間ももうおそかったので、誰も意に介さずに、祠の軒下に銃を立てかけ、大勢の人が石の獅子の下に腰をおろして、身につけていたすべての荷を解いた。

一人の若いラッパ兵がどこからか焼酎のたっぷり入った瓢箪を手に入れてきて、塀のすみっこに隠れて一人でむさぼるように飲んでいた。それを見つけた兵士たちがわれさきに瓢箪を奪いあったので、とうとう瓢箪は割れて、まだ乾ききっていない敷石の上に酒が全部ぶちまけられた。ラッパ兵は怒って、大声で悪態をつき、さらに酒を奪った仲間を追いかけて殴った。

中隊長は騒ぎを聞いて、ラッパ兵の役目を思いだし、連隊と連絡をとるためにラッパを吹かせた。ラッパ兵は石の獅子によじのぼり、片手で夕日に照らされた獅子をつかみ、片手で銅製の小さいラッパを持って、応答を求めるメロディーを

一曲吹いた。夕暮れの風にのって響きわたる音色は、人の心に深くしみわたった。

そのとき夕焼けが空を染め、どの家からも炊事をする白い煙が上がり、屋根に漂っていた。多くの若い女性たちは驚きと好奇の表情を浮かべ、洗って糊をつけた薄藍色の服を着て、花柄の前掛けをかけて、子供を抱いたまま、家の軒下からはるか遠くの騒ぎをながめていた。

そのラッパ兵がラッパを吹き終わると、山頂の廟に駐屯している連隊から応答が聞こえてきた。中隊長はまたラッパ兵にラッパを吹かせ、本隊がこの祠で休んでいいかどうかを尋ねさせた。あちらからの答えに、私たちの中隊長は満足しなかった。そこで、ラッパ兵は唇をふくらませて、三度目のラッパを吹いた。

街の南端に、二匹の犬がやってきた。堂々とした体格、きれいな白い毛、聡明な目つきをして、まるで双子の子供のように、人々の前に立った。こいつは明らかに、祠の前で何かが起こったことを知って、わざわざ見にやってきたのだ。

その二匹の犬は私たちの想像をかきたてた。私たちの習慣では、どこへ行ってもまるまるとした犬を見れば、たちまち心に殺気がわきおこり、簡単にはおさまらないのだ。しかし、もう一つもっと人の注意を引きつけたのは、「阿白(アーバイ)」、「阿白(アーバイ)」と呼ぶ、朗らかですんだ女子の声が聞こえたことだった。二、三回呼ぶと、その二匹の犬は私たちの方を見やりながら、とてもものわかりがよく、ここで長くは遊べないと知っているかのように、身を翻して走っていった。

空は暮れかかっていた。赤い雲が空を染めていた。

私たちの中で突然、思いがけない事故が発生した。あのラッパ兵は、まる一日歩いて目的地に着いた後、みんながすわって休んでいるのに、石獅子によじのぼって何度もラッパを吹いた。その後、足がしびれたので、石獅子から飛び降りようとしたとき、なんと両足には彼の体を支えるだけの力がなくなっており、地面に飛び降りると、転んで起きあがれなくなった。両方の足をひねって筋を傷めてしまい、二度と普通の人と同じように歩けなくなってしまったのだ。

そのラッパ兵は私と同郷だった。私たちは同じ村で大きくなり、同じ川で泳いで夏を過ごし、同じ森できのこをとって長い一日をつぶした。いま私が彼の面倒をみてやる番になったのだ。

二十歳の男がこんな不幸に見舞われて、どうすればいいというのか。中隊長も

同郷だったので、ラッパ兵が職務を解かれることはなかった。しかし、彼はこの不幸な出来事のために、永遠にラッパ兵の地位にすえおかれることになった。彼は他のラッパ兵のように幹部学校に入って出世するチャンスを得ることもできず、匪賊討伐のいろいろな作戦に参加する資格を得ることももうなくなり、また他の若い兵士のように夜中に土壁を乗り越えて当地の女子とあいびきすることももう二度とできなくなってしまった。つまり、彼の人間としての権利は、思いがけない転落のために、すべて抹消されて、とりかえしがつかなくなってしまったのだ。

私は同郷だったために、いつもとくに彼の面倒をみてやった。そのとき私は伍長[1]だったので、私は彼を自分の宿営に入れてやった。この若者は相変わらず毎朝空が白みはじめると起きだし、軍服を着て、身なりをきれいに整え、祠の外の石段に行って、夜明けの起床ラッパを吹いた。十分後にまた点呼ラッパを吹く。八時に訓練ラッパを吹き、十時には訓練終了ラッパを吹く。……これ以外にもいろいろあって、どれもおろそかにすることはできない。軍隊がここに着いてから半月ばかりのあいだ、まったく訓練が行われなかったが、そのラッパ兵はきまりどおりにラッパ兵の職務を果たさねば気がすまなかった。彼が外へ出てラッパを吹くときは、いつも私が支えてやらねばならなかった。私に暇がないときは、その任務は分隊の中の炊事夫がやることになった。

私たちはみな彼が徐々に快復することを願っていたし、大隊本部の外科軍医はかなり信用のおける保証を、この不幸な男に与えた。軍医は若者の両足から血を抜いて、長いこともみほぐし、そのうえ何度も薬であぶって、最後に杉の木の板ではさんだ。日一日と過ぎていったが、少しも効果はあらわれなかった。私たちは多少失望したが、彼自身は失望していなかった。

彼は、きっとよくなるさ、二、三ヶ月たてば杉の添え木をはずせるようになり、畑で野うさぎを追いかけられるようになるさ、と言った。その話を聞いて、老軍医は笑った。そんなことはこの若者には永遠に望むべくもないことだと、彼はとっくに知っていたからだ。だが、彼は医者としてのつとめを守り、かつ法律もまたこの種の職業の人がうそをつくことを許可しているので、彼はこのラッパ兵にさまざまな期待を、ときにはうさぎを追うよりもっと大げさで事実に合わない期待をいだかせた。

---

[1]原文は「什長」。軍隊の末端組織で、兵士十人で一組のリーダー。

二ヶ月が過ぎても、この若者はまったく役立たずのままだった。傷の腫れはひいて、毒素血症の危険はなくなり、傷が化膿することもなかった。しかし、そのラッパ兵はすでに完全なびっこになってしまった。彼はすでに人の世話がなくても、職務を果たすことができるようになっていた。彼は相変わらず私の宿営に泊まり、そのため私たち二人の間には、最もすばらしい友情が成立した。

私たちが駐留していた町は、それほどにぎやかではなかったが、湘西の辺境にある他の小都市と比べると、一種独特の雰囲気があった。そこには四本の大通りしかなく、真ん中の鼓楼が町全体を支配していた。よそと同じように、薬屋とタバコ屋があり、賭博場と飲み屋があった。私は毎日ほとんどこのびっこのラッパ兵とともに仕事をし、外出するときはいつもいっしょで、酒を飲むときも二人で助け合い、ばくちを打つときも二人で分けあった。

部隊の移動がなければ、この若者には以前と同じように兵隊としてのすべての幸せがあった。兵士にできることは何でも、彼にも同じように分け前があった。彼が若い女性のところに行けば、女性たちは彼に失礼なことはしない。彼がテーブルについて一回に五十文を賭けるブラックジャックをすれば、誰も遠慮してごまかそうとはしない。彼がラッパを吹けば、むかし彼にかなわなかった者はみな、やはりいまも彼を超えることはない。誰もがこのラッパ兵の不幸を知っていて、暗黙のうちに彼を手助けしていた。

しかし私には、彼の性格が少し変わったように見えた。彼は一人のラッパ兵であって、ラッパ兵の常にもれず、自分のラッパにはもちろん特別な愛着があり、用事がなくて出かけるときにも、ラッパはいつも肌身離さず持っていた。ラッパ兵というのはやはりきまって動作俊敏な、活発でもの好きな人であるものだ。やわらかな朝日の中、裏山や砦に登って音あわせをしたり、夜中に月光の下で自分の曲を吹いて、はるかかなたの別の連隊と互いに唱和することができる。市がたつときには、よその連隊のラッパ兵は、みんなきちんとした制服を着て、整列して市場をパレードする。行進するさまは町の人に見せびらかしたいほどだ。もしかすると丈の低いドア[2]の後ろに隠れて、まっ白なこめかみと黒いつぶらな瞳をのぞかせた女性たちの気を引くという、思わぬ幸運に恵まれるかもしれない。さらに、もしラッパ兵の行動が自由でかつ都合よく、ラッパをもち山へ行って吹け

[2]原文は「腰門」。湘西の民家に見られる背丈の低いドアで、外から家の中が見えないようにするためにある。

ば、どんなにたくさんの子供が、かすかにおびえながら取り囲んで、この大人物の技芸を鑑賞することだろう。ラッパ兵は子供たちと友情を結ぶことができる。ラッパ兵にはだんだんとたくさんの小さな友達ができるのだ。

ラッパ兵の職務外に属する利得は、すべて失ってしまった。彼に残されたのは、わずかな受け持ちの職務だけだった。いつもは活発でもの好きな彼が、いくぶん憂鬱で哀れになった。彼の足はびっこになってしまった。中隊長は人前で、びっこと大声で呼んだ。ある種の便利さのため、識別上、見分けるのを容易にするために、このラッパ兵がびっこになってからというもの、みんなはラッパ兵の名前に「びっこ」の三文字を付け加えた。中隊の炊事夫でさえ彼を軽視する権利を有して、互いに軽い気持ちでこの不幸な人のことをあれこれ言い、しかもこっそり彼の動作をまねしてはおもしろがっていた。

はじめのうち、彼は相変わらずラッパ兵の職務を、元気な人と同じようにこなし、時間どおりに祠の外か中の本堂前の石段に立って、とても高揚した気分でラッパを吹いていた。その後、中隊に若い副手が一人補充されて、その若いラッパ兵がいろいろな曲をかなり正確に吹けるようになると、彼は時間どおりにつとめをしないことが多くなった。

彼は毎日、私といっしょに南街（ナンジエ）にある豆腐売りのところへ行って、そこの長い木のこしかけにすわり、店の若い旦那が豆汁をひいて豆腐を作るのをながめた。その店の向かいは郵便代行所で、町の様々な店の中で最も景気のよい店がまえをしていた。道の向かいからながめると、クリーム色をした店の大きな板壁には多くの書画と、金箔や金粉で飾った多くの対聯が掛けてあった。最初に来た日、私たちが見たあの二匹の白い大きな犬は、この家で飼っている犬だった。その犬は毎日門の前にすわっており、知り合いを見ると立ち上がってしばらく遊ぶ。やがて人の呼び声がすると、そそくさとした様子で、金魚の入ったかめのある中庭へ入っていくのだった。

私たちは豆乳を一杯ただで飲むために、一日中この店にいりびたっていたわけではなかった。私たちはこの若い旦那と本気で義兄弟になりたくて、彼と仲良くなるために来ているわけでもなかった。

私たちがここへ来るのにはほかの理由があった。二人の兵士のうち、一人は障害者で、もう一人は伍長に指名されており、拝謁のときに隊列から出て点呼した

り、兵士の仲間うちではある程度顔がきき、将校たちにもある程度顔がきいて、あたかも予備将校のようであった。さらに便利なことは、いろいろと勝手におかしな名前をつけては分隊の炊事夫を罵って、むしゃくしゃしたときの気晴らしができることだった。しかし、ひとたび外へ出れば、どんな威厳があるというのか。分隊長は、一つの中隊に十人か十二人はおり、一つの大隊では三十六人、一つの連隊には百人以上もいるのだ。伍長の肩や襟につけた徽章は、私たち軍人の身にあってはただ責任が増えるだけで、一兵士なら得られる多くの利益が、分隊長であるために得られなくなるのだ。兵士に許される放縦が、分隊長には許されない。作戦時の分隊長と小隊長の職責を知っている人がいれば、誰もが分隊長を気の毒に思うことだろう。私がここへ来るのは、分隊長をきどってではなくて、勝手に一兵士の資格でもって、この豆腐屋へ来るのだ。私たちは毎日、この独り身で頑丈な若者の手から、一杯の豆乳をもらって飲むことを拒みはしなかったけれども、けっして豆乳を飲むために店へ通っているのではなかった。私たち二人は、実は、あの二匹の白い犬と、その犬の女主人に惚れてしまったのだ。ガマが白鳥の肉を食べたがる、とはまさに私たちのことを言っているようだった。

この女ときたら、なんて美しい生き物なのだろう！　生まれてこのかた、こんな女子は二人と見たことがない。私は師団長のお妾さんや女学生をたくさん見たことがある。前者はたいてい娼妓の出身か、または夫人の座に着くと娼妓に変身する。後者のたくましさは恐るべきものだ。彼女たちが道を闊歩したり、球技をしたり、そのほか私たちの思いもつかないようなことをするとき、彼女たちは水牛に変身するのだ。彼女たちには上品さやしとやかさというものがない。この人はといえば、私は彼女のどこがすっかり気に入ったのかうまくことばで言い表すことができないが、本当のところ、私はいつもその人を一輪の花、一人の仙女のように思っていたのだ。

私たちは軍規に従うと同時に、自分たちの欲望にも従った。この町で私たちは羽目をはずして騒ぐわけにはいかなかった。そこで私たちは毎日この豆腐屋に来てすわりこむことになった。ここに来て若い旦那とおしゃべりをしたり、彼が臼をひき、豆汁を絞り、豆腐をしあげるのを手伝ったりしながら、あの女が外へ遊びに出るときに、その姿を一目見ようと待ち望んでいた。私たちはあの中庭の大きな金魚のかめのそばに白衣の一端が見えると、いつも心臓がどきどきし、激しい勢いで血が全身の血管をめぐるのだった。私たちは毎日あれこれ方法を考え、

あの二匹の犬に食べさせるものを買って、この畜生と仲良くなろうとした。はじめこの畜生は私たちに下心があるのを知っているかのように、与えたもののにおいをちょっと嗅ぐだけで立ち去っていった。しかし、あとで豆腐屋の旦那が同じものを投げてやると、二匹の犬は聡明な目つきで旦那をながめ、それが毒ではないことがわかったようで、それで食べ始めたのだった。

どうしてこんな望みのないことに夢中になったのか、私たちは自分でもわからない。私たちの身分では、たとえあの家の二匹の犬と仲良くなれたとしても、その犬の飼い主に近づくすべがあるはずはないのだ。あちらは当地の郵便代行所の主人、つまりこの小さな町で唯一の名士なのだ。彼は商工会議所の会長で、その店は軍隊の両替機関でもあった。始終お客を招待するのだが、ここへ呼ばれるのはみな家柄がよく身分の高い人ばかりで、連隊長に大隊長、連隊の副官、士官、物資担当官などが勢ぞろいだった。ふだんも大隊本部の物資担当官と書記官がしょっちゅうその店に遊びに来て、主人と酒を飲み賭けごとをしていた。

私たちは豆腐屋の旦那の口から、あの女は会長の一番下の娘で、まだ十五歳だということを聞いた。私たちにはまったく望みのないことがわかったが、それでも毎日豆腐屋に来て腰をおろしたついでに、その大事に育てられた娘が外に出てくるのを待った。あの明るくまばゆい女を一目見ただけで、私たちはその日一日をとても愉快に感じた。あるいは一日中、目にする機会がなくても、彼女が家で飼っている犬の名前を呼ぶ大白（ダーバイ）、二白（アルバイ）というあのよくとおる声を聞いただけで、私たちはまるである種の慰めを得たかのようであった。私たちはいつもあの金魚のかめを夢中になって見つめていた。なぜなら、そこから白や薄緑色の服がちらりと見えることがよくあり、あの娘が家の中庭で遊んでいることがわかるからだった。

ときがたち、あの二匹の犬は私たちと友達になった。私たちが来るのを見ると、やや慎重に用心深い様子で、豆腐屋にやってきて私たちと遊んだ。私たちはこの畜生をかわいくも思い、恨めしくも思った。なぜなら、たとえ楽しく遊んでいても、あちらで呼び声がすると、たちまち私たちから離れて行ってしまうからだ。それにしても、この畜生はなんてよくなついて、よく言うことをきくんだろう！どんな犬も永遠に兵士とは仲良くならないものだ。どの犬も兵士とは仇敵になって、すきに乗じて襲いかかってくるか、一目見るなりかけだして逃げるかのどちらかなのだ。ところが、この二匹の犬だけはなんと本当に私たちの友達になった

のである。

豆腐屋の旦那は若くて頑丈な体つきをしており、口数は少なく、毎日楽しそうに働き、誰とでも商いをして、夜になると店の戸を閉めて寝た。見たところ、まるで彼は店頭で番をする以外は何もせず、商売をする以外はどこへも行かないようだった。最初のころは、この人はいつご飯を食べ、いつ豆腐を作るための大豆を買いに行くのかもわからなかった。彼はあまりしゃべらないが、お客さんが店に来ると、彼はいつも応対をおろそかにすることはなかった。私たちがどんなことを聞いても、彼はいつも満足のいく受け答えをしてくれた。

私たちは彼を誘って酒を飲んだことがある。支払いの段になって、帳場で勘定をしようとすると、豆腐屋の旦那がすでに支払いをすませたとのことだった。二度目に私たちが彼を誘ったときには、彼は少しも遠慮せずに私たちに金を払わせた。

私たちは彼が田舎から出てきたということしか知らなかった。ときには田舎の親戚が彼の店に来ていることもあった。その様子からして、彼の家はそれほど貧しくはないはずだった。彼の商売はうまくいっており、彼は私に貯まった金は田舎へ送っていると言った。彼に嫁さんをもらうつもりかと聞くと、彼は笑って答えなかった。彼は歌が歌えた。声がすばらしく、音程も調子も私たちの大隊の誰よりもまさっていた。彼は将棋もさすことができ、文字を知らないのに、「車(ジュー)」「馬(マー)」「象(シャン)」「士(シー)」[3]をちゃんと区別した。彼は商売をするとき、帳簿をつけたことはなかった。しかし、売掛金はすべて記憶か別の方法で覚えており、間ちがえることはなかった。彼は私たちを友人としてあつかい、私たちを警戒することもなく、私たちに媚びへつらうこともなかった。私たちが彼の店に来るのは、あの商工会長の娘を見るためだけのようではあったけれども、もしこのような気のあう旦那がいなければ、私たちも晴雨にかまわずこの店にいりびたることはなかっただろう！

私とあのびっこのラッパ兵は、彼の豆腐屋で向かいの娘のことを話すとき、ついつい下品なことやバカげた話をしたり、あるいはあの二匹の畜生に、おかしなまねをしたりすることもしばしばあったが、あの若い旦那はいつも微笑んでいた。私たちは彼の微笑みに何の悪意も感じなかったが、何か秘密があるようだった。

---

[3]いずれも中国将棋のこま。

そこで私は言った。

「何を笑ってるんだよ？　彼女を美人だと思わないのか？　あの二匹の犬はおれたちより運がいいと思わないのか？」　いつものように、こういった話に対して返事が得られるはずはなかった。返事があるとしても、彼は相変わらずただ誠実温厚な、女性が恥じらうような表情の微笑を浮かべるだけだった。

「何がおかしいんだよ？　おまえら田舎者は、美しさがちっともわかっちゃいない！　おまえらはきっとケツとおっぱいのでかい女が好きなんだろう。めすブタや水牛が好きなのさ。肥えて大きいほうが役に立つからな。だが、それはおまえが美人を知らず、美しいものを知らないからなのさ。」

ときにはあのラッパ兵も、「このくそ犬め、なんて運のいい野郎だ！」と言うことがあった。しかもわざとその豆腐屋の旦那を困らせるために、犬になってあの娘と毎日仲良くするチャンスを得たいと思わないか、と彼に尋ねるのだった。

そういうとき、この若者はいつもきまって顔を赤らめて、ことさらに精を出して臼をひきながら、やはり微笑むのだった。

それにどんな意味があるのか、誰も知らなかった。またその意味をどうしても追究しようとする者もいなかった。

私たちの日々は、愉快に過ぎていったといえる。なぜなら、私たちはここへ来て豆腐屋の旦那と遊び、豆乳を飲んであの美人を見る以外に、しょっちゅう広場へ行って人を殺すのを見ることができたからだ。私たちの連隊は、市がたつ五日おきに、各地の村から連行されてきた匪賊の中から、悪いことをした証拠のある者を何人か選び、広場の大きな道へ引っぱってきて、首を切って見せしめにすることになっていた。かつて懐化(ホァイホァ)[4]に駐屯していたおり、人を殺すときに、もし本中隊に護送の任務が割り当てられ、そのうちの一小隊が犯人を引き連れてくることになると、ラッパ兵は隊列の先頭に立って、大通りでラッパを吹かねばならなかった。広場に着いて、隊列がかけ足で前にならえをし、突撃ラッパを吹くと、あたりは重苦しくなった。人を殺し終わって、駐屯地に引き上げるときには、大通りをゆっくりと通過し、勝利の凱旋曲を吹かねばならなかった。いまやこうし

[4]湖南省西部にある現在の懐化市は、1970年代の鉄道開通によってできた町。沈従文当時の懐化鎮は、現在の懐化市から15キロほど離れており、別名を瀘陽鎮という小さな村だった。向成国「沈従文作品背後的小故事」（『湘西：沈従文研究』3,恵庭：湘西刊行会,2001）pp.27-28参照。

たことはびっこのラッパ兵の役目ではなくなってしまった。いま護送するのはすべて護衛隊、つまりふだん連隊長が田舎へ行って匪賊を討伐するときに連隊長の安全を守る親衛隊の役目となり、人を殺す権利も彼らだけが独占することになったのだ。私たちはあの悲壮な行列と流血の喜劇をただながめることしかできなくなった。私ももはや分隊長の資格で隊列を組み、犯人を護送しながら町中を引きまわすことができなくなった。だが、それは私たちにとって損失ではなく、むしろ好都合だった。私たちは広場で護送をしなくなったので、いつでもそこへ行って殺されたあとの人の首や、黒ずんで硬直した死体を見ることができた。しばらくそこにとどまることもでき、すぐに立ち去る必要もなかった。

豆腐屋の旦那はふだんこのようなことを見る度胸がなかったので、あるとき、私たちが彼を連れていった。どす黒い血痕の残っている場所へ来ると、四体の屍が広場に横たわっており、上着は完全にはがされて、まるで四頭の死んだブタのようだった。多くの若い兵士が不相応な軍服を着て、顔にはとてもいたずらっぽい表情を浮かべて、小さな竹ざおで屍ののどもとをつついていた。飢えた犬が何匹かはるかむこうのかたすみにしゃがんで、ぼんやりとこちらの風変わりな様子をながめていた。

こいつを見て恐くないか、とラッパ兵が豆腐屋の旦那に尋ねた。この若い田舎者の返事は、永遠に神秘的で、永遠に悪意のないいつものあの微笑であった。この若者の微笑を見て、私たちは我々の友情に喜びを感じ、ちょうどあの女子の声を聞いたときと同じように、生命が完全に一つになったような気がした。

とても楽しかったので、私たちの毎日はみるみるうちに過ぎていった。

私たちがその豆腐屋の番をしながら女のことをながめるようになって、またたくまに半年がたった。

私たちは豆腐屋の旦那とますます親しくなり、あの二匹の犬とも完全になじみになった。私たちはチャンスがあれば、その白犬を駐屯地へ連れていったり、川辺に連れていって遊んだりするようになり、なんとその犬の主人から同意をもらうことまでできるようになった。

あの女にはまったく望みがないことがわかったので（豆腐屋の旦那と親しくなってから、彼の口からいろいろなことを聞き出したのである）、私たちはもうバカげた話はしなくなり、またバカげたことをしようともしなくなった。それでも相

変わらず毎日豆腐屋に遊びに来ては、この友人を手伝ってあらゆることをした。私たちは豆腐の作り方を完全に覚え、豆汁の火加減や、大豆のよしあしまで見分けられるようになった。そのほかに私たちは当地のお客さんとたくさん知り合いになり、彼らも私たちと話したり、友達になったりしたがった。駐屯地の兵士がお客さんのときは、私たちの旦那はいつも私に豆腐を多めにやるように言い、ときには客から金をもらわないこともあった。私たちの生活は豆腐屋の商売と一つになり、またあの二匹の白犬とも友達になり、とても親しく仲良しになった。あの娘の声は相変わらず私たちの身辺から犬を呼び戻すことができたけれども、ときには私たちが口笛を吹くと、二匹の犬が家から飛び出してくることもあった。

私たちは若い将校が立派なラシャの軍服を着て、蒼白い顔をちょっと恥ずかしげに赤らめ、胸をしゃんと張って歩き、拍車のついた黒革の軍靴で敷石を鳴らしながら、威風堂々とあの家の中庭に入っていくのをしばしば目にして、その中できっといろいろな出来事が起こるのだろうと思うと、耐えがたい嫉妬心でいっぱいになった。それでも私はいくらか分別のある人間だから、そんなショックを受けても、別の方法で自分を慰めることを知っていた。しかし、私の相棒のびっこのラッパ兵は、そのためにひどく機嫌を悪くした。私は彼がそうした若い将校たちに対して、うしろからこっそりとげんこつで殴りつける格好をしているのをしばしば目にした。また彼が豆腐屋の旦那と、私の気づかないことを話しているのを目にしたこともしばしばある。

あるとき、小さなめし屋で二人とも酒を飲みすぎて正体をなくし、こんなことを言ったことがあった。私はあのびっこのかたわに向かって言った。

「友よ、おまえはかたわだ。兄貴、おまえはかたわなんだよ！　あのお嬢さんは若い大隊長に嫁ぐにきまってる。川辺に行って顔を映してみるがいい。そうすればおれたちに望みがないことがわかるさ。おれたちが何様だっていうんだい？　ひと月四元で、移動のときには泥の中を歩きまわり、駐屯すれば点呼と訓練、夜はわらのむしろに寝てシラミにくわれ、牛の肉と漬け物ばかりくらって、手にはあの冷たい銃を持たされる。……おれたちは若いけど、それがなんの役に立つ。おれたちは隊列を組んだブタや犬にすぎないのに、どうしてあの娘に野心など持つんだ？　どうしてそんなに身の程知らずなんだ？……」

そのとき私はたしかに酔っぱらっており、ことばづかいに気をつけることを忘れて、わけもわからずに、ふだんお世辞を聞くのが大好きなこの友人に説教をし

てしまった。そのうえ私はたくさんの喩えを使って、彼の足のことを言ったようだった。そのとき、そこには私たち二人しかおらず、それからなぜだかわからないが、この友は突然ふだんの気だてとうってかわって、まるで狂ったけだもののように、私に飛びかかってきた。私たちはひとかたまりになって殴りあい、互いに相手の耳を引っ張って、二人とも思いっきりこてんぱんに殴りあった。私はすっかり酔っており、彼も多少酔っていた。私たちが意味もなく罵りあって喧嘩していると、やがて兵士たちが外を通りかかって、中の騒ぎを聞きつけ、仲間だとわかってなだめに入ってきた。あれこれ手を尽くして、やっと私たちを引き離した。

中隊に帰ると、二人はかなり吐いた。夜中に酒が醒め、二人とものどが渇いて、起き上がって水がめのところで水を飲んだ。二人は冷たい水をたっぷり飲むと、ぼんやりと昨夜のことを思いだし、いっしょに泣き出した。どうしてあんな殴りあいをしたのだろう？　なぜ私たちはあんなに激昂したのだろう？　なぜあんなことをせねばならなかったのだろう？　私たちは最近支給されたばかりの綿入れの軍服を引っかけて、いっしょに中庭へ出て、まもなく沈もうとする死人の顔のような月を見た。空ではあちこち流れ星が落ちて、まぶしく美しい光を放っていた。あちこちでにわとりの鳴く声がしていた。私たちが防衛のためここに来て駐屯し、私のこの友人が足を傷めたのは四月だったが、いまはもう十月になっていた。

翌日、二人は相手の腫れあがった顔を見て、とても気恥ずかしかった。中隊の人は私たちが殴りあいをしたのを知ると、私たちが二度目の喧嘩をするのではないかと心配する者もいたにちがいない。しかし意外なことに、昨夜の酔ったうえでのことは、私たち二人ともとっくに忘れてしまっていた。私たちはそのことを覚えていなかったわけではないけれども、そのために二人の友情はいっそう厚くなったようだった。

二人はいつものように豆腐屋へ行った。豆腐屋の旦那は最初見たとき大変驚き、私たちの間にきっと重大な事件が起こったのだと思ったようだ。なぜなら私たち二人の顔には引っかき傷があり、腫れあがったところもあったからで、私たち自身も互いに顔を見あわせて吹き出しそうになった。

それから、私たちの友人に私からわけを説明してやり、豆腐屋の旦那はようやくことの次第をのみこんだ。私は彼にこう言った。私はいろいろとでたらめなことを言い、彼のことをびっこのオス犬と罵ったことをぼんやり覚えている。それ

からなぜだかわからないが、二人は取っ組み合いになった。幸い二人とも酔っぱらって手足に力が入らず、思うように動かなかったので、行動は激しかったが、頭部を殴ってけがをさせるようなことにはならずにすんだんだ。

そのときあの娘が出てきて、家の門の前に立った。二匹の白犬は媚びるように女のまわりを跳びはね、ぐるぐる回り、真っ赤な舌を出して女の小さな手をなめた。

私たちがしばらく何も言わずに、三人でむこうをながめていると、やがてあの女も私たち二人の顔の様子がおかしく、いつもとまったくちがうことに気づいたようだった。そして私たちを見て微笑んだ。まるでちっとも私たちを恐れず、私たちが彼女に下心をいだいているとは疑いもしていないようだった。しかし、その微笑は、まるで私たちの昨夜の喧嘩の原因が、いったい何であったのかを見ぬいているかのようであった。

この娘は私たちのことをちっとも気に留めもしないで、あのちっちゃな心の内で、私たちがわずかな金をかせぐために、この豆腐屋の旦那と共同で商売をしていて、それで毎日ここに来るのだと思っているかもしれない。そう思うと、私はそのときまったくひどく憂鬱になった。ちらっとあのラッパ兵に目をやると、彼の様子もきわめて憂鬱そうだった。なぜなら彼のあのびっこの足のことは、その人にとっくに知られていたからだ。彼の様子は私よりもっと落ちこんでいたので、私は彼がそのときとてもつらい気持ちなのだと判断した。

豆腐屋の旦那はといえば、彼は意識的にかどうかわからないが、そのとき鉄のように頑丈な腕をまくりあげて、あの石臼をひっくり返して、石臼の中軸が壊れていないか検査していた。そうするのはたしか三回目だった。別の一回も、このようなチャンスが訪れたときに、この若く誠実で単純な男は、今日と同じように彼の石臼を検査したのだった。

私は彼にそのことを聞いてみたかったが、口に出す機会がなかった。

まもなく、あの人は中庭にあるあの緑地に金箔を貼った門の内に消えて見えなくなった。星のように、虹のように、一瞬の間に消え去ってしまった。私たちの心に残されたのは、一つの明るい印象だった。私がびっこの友の気持ちを察して微笑みかけようとしたちょうどそのとき、私のその友が突然言った。

「兄貴、兄貴、あんたは昨夜おれを罵ったが、そのとおりだよ！　おれたちは

ブタや犬だ！　おれたちはドブの中のガマだ！……」

ラッパ兵のそのみじめな様子を見て、私は何かことばをさがして、この不幸なかたわを慰めてやらねばと感じた。私は言った。

「そう言うなよ。そんなことは男が言うべきじゃない。おれたちにはおれたちの心意気がある。その心意気さえあれば、なんでもできないことはないさ。大きな高殿も地面から建つ、というだろう。おれたちは総統になり、将軍になるんだ。女一人なんか、たいしたことあるもんか。」

ラッパ兵は言った。「おれは総統になるつもりはないよ。それはとても難しい仕事だから。おれのこの足め、くそったれ、おれのこの足め！……」

「おまえがまともな人間になれないと誰が言った？　おまえの足は将来きっといい方法が見つかってよくなるさ。そしたらおまえは、中隊長の推薦によって幹部学校で勉強することも望めるんだぞ。おまえはほかのたくさんの学生と同じように、自分の能力で地位をつかみとれるんだぞ。」

「おれは犬にも劣ったやつさ。おれがいま望むのは、もし足がよくなったら、中隊長に頼んで正規兵の要員に入れてもらうことさ。そうして一日中、練兵場で訓練して……」

「だんだんとできるようになるさ。」私はふりむいて豆腐屋の旦那の方を見た。この若者はすでに石臼をきちんとすえつけて、今度は長い木の取っ手を揺り動かしていた。「おれたち生きていても、臼をひくのと同じで、まったくつまらないな。おまえさん、どう思う？」

この男は、まるで私の言ったことが私の身分と不釣り合いで、彼の生活にも似つかわしくないと思ったのか、やはりほかのとき、ほかの場合と同じように私に対して微笑した。

私ははっきりとわかった。私たち三人は同じようにこの女子を好きになったのだ。

十月十四日、私は一通の公文書を届けるために三十五キロ離れた総司令部に派遣された。ほかにも別の仕事があり、石門(シーメン)[5]で手紙を待つために一日泊まり、途中の往復でも二日を費やした。

---

[5]湖南省北部の町。

当地に戻り、返信を連隊に届けて任務が終了すると、今回の出張のおかげで、六元の報奨金をもらい、とてもうれしかった。実家で冬の干し肉を作るために四元を仕送りしようと思い、中隊に戻って帰省する人がいないか尋ねるつもりだった。中隊に戻ってびっこに会うと、私がまだ何も言わないうちに、そのラッパ兵が言った。

「兄貴、あの女が死んだ！」

いったいどういうことだ？

私はゆっくりと身をかがめて草履をぬぎながら、まだ信じられなかった。びっこが私の目の前に立って、もう一度「女が死んだ」と言ったので、私も本気にせざるをえなくなった。そのことばの意味をはっきりと聞きとると、私は突然立ち上がり、ひどく乱暴に彼の襟首をつかんで、大声でことの真偽を問いただした。すると彼は私に耳でよく聞いてみろと言った。ちょうどそのとき遠くの家で、葬式のドラと太鼓の音がし、チャルメラがひどくもの悲しいふるえるような高い音色を響かせていた。私は片足ははだしのまま、片足はぬれた草履をはいたままの格好で、びっこを引っ張って外へ出た。私たちは火事を消すときのように、ラッパ兵のびっこの足も、道行く人のこともおかまいなしに、豆腐屋めがけて走っていった。しかし着かないうちに、そのチャルメラとドラの音は、あの豆腐屋の向かいの家から鳴り響いていることがわかった。私は全身にさむけがして、まるで誰かに頭をこっぴどく殴られたかのように、ゴンゴンと耳鳴りがした。私は思った、これはおかしなことだ！　まったくおかしなことだ……。

私がその豆腐屋の長いこしかけにそっと腰をおろすと、友が私に熱い豆乳をわたしてくれた。豆腐屋の向かいの家の門前には、いつのまにか多くの人が集まっていた。門前には葬儀の白布がかけられ、たくさんの子供たちが頭に白い頭巾をまいて、門の外でものを買って食べていた。あの大きな魚のはいったかめのそばでは、人が身をかがめて火箸を使って銀箔を張った紙銭を燃やしており、炎がめらめらと燃えあがり、灰が高く舞っているのが見えた。

私はこれらのことがすべて本当だとわかると、全身がひきつり、それなのに笑いだした。

豆腐屋の旦那に目をやると、その人はそのときこれまでのように楽天的ではなく、明らかにショックを受けて、動揺していた。彼は私を見なかったふりをして、

顔をそむけた。私はラッパ兵のほうも見てみた。ラッパ兵は我慢ならないといった様子をしていた。なぜだかわからないが、私はそのとき本当にこのびっこの人に我慢できなくなり、一発殴ってやりたくなったが、けっきょく私はそんなバカなことはしなかった。

それから私が尋ねてようやく、あの女子は昨日、金を飲んで死んだのだとわかった。なぜ金を飲んだのか、誰と関係があるのか、私たちは当時何もわからなかったし、今になってもそれを知るすべはない。（多くの人がこうやって死に、生きている人は少しも変だと思わないのだ。）女が死んで、私たちはみな何かを失ったと感じた。それまではけっして口に出せるはずもなかったが、そのときはじめて失ったものの名前をおそるおそる言ってみた。私たちははじめのうちとても憂鬱そうに言ってみて、言っているうちにやがてみんな笑いだし、別れるときには、私たちは互いに押したりたたいたりするほど喜びあっていた。

どうして私たちはそんなにうれしくなったのか、それはうまく説明できない。その女は鉢植えの花のように、自分に手のとどくものではないことが、みんなわかっていたようだった。その鉢植えが割れると、最初はいくらかうちひしがれる。しかし、多くの鉢植えがろくでもないやつらに長いこと占領されており、しまいにはすべての鉢植えが権力者に独占されるということにみんなの話が及ぶと、その鉢植えが地面で叩き割られたときしか、私たちがいくらか気を晴らすときはないのだということになった。

しかし、駐屯地に戻ると、私たちはとてもつらい気持ちになった。私たちの生活はすっかりぶちこわされてしまった。これからはもう二度と、何かのできごとに心おどらされることもないし、何かの夢にぼんやりとすることもない。私たちの生活には、永遠に目に見えない穴がぽっかりあいてしまい、そこをつくろっても、もう二度ともとどおりにはならないのだ。

実のところ、こんな女が世の中に生きていようと死んでいようと、私たちにいったいどんな関係があるというのか？　もし、その人が元気に生きていたとしても、部隊にいったん移動命令がくだれば、私たちにいったいどんな希望があるというのか？　たとえ、私たちがここにもっと長く駐屯するとしても、びっこのラッパ兵に伍長という、この二人のできそこないに、いったいどんなチャンスがあるというのだ。あの二匹の犬と知り合いになること以外に、いったいどんな偉大なくわだてがあるというのだ？

翌日、二人は朝早く起きて、板ベッドに腰かけて互いに向き合い、黙りこくっていた。二人ともこれ以上過去の記憶に閉じこめられないように、自分を広々としたところへ解き放とうと努めているようだった。二人は怒り出したい気分だったが、どうして突然こんなにいらいらするのかわからなかった。

「どうしてそんな腫れぼったい目をしているんだ？　このまぬけ野郎！」

ラッパ兵は私に嘲笑されたのに、反撃の姿勢もとらず、ひどく哀れな様子で私のほうを見た。

私は言った。「人が死んだからといって、まさかおまえが葬式でも出す気か？」

彼はなおもそのままだった。まるで沈黙によって良心を勇ましく代弁させて、彼の行為に私の気をひこうとしているかのようだった。

私はそのことがわかっていたが、彼を嘲り罵る権利を放棄しようとしなかった。

「びっこ、おまえは虫けらを食って、空を見上げる、ほんもののガマだ。」

しまいに彼は小さい声で私に尋ねた。「兄貴、死んだ人が生き返るってことは、あると思うかい？」このバカげた話のために、私はまた何度か彼をこてんぱんに言いのめした。

二人が豆腐屋に来ると、向かいの門はひっそりと静まりかえり、門前の地面に白くなった紙銭が残されていた。私たちの友人、あの若い旦那は、長いこしかけにすわって、ほおづえをつき、豆腐を買いに人が来ると、お客さん自身に板の上の豆腐を包丁で切りわけてもらっていた。私たちが来たのを見て、彼は少しばかり生気を取り戻したが、まるで自分の傷痕をおおいかくすかのように、私たちに向かって以前と同じように微笑んでみせた。彼の笑みは、彼が相変わらず健康な肉体と善良な人格を有していることを物語っていた。

「どうしたんだい？　頭でも痛いのか？」

「埋葬したよ、埋葬した。朝早くに埋葬したんだよ！」

「朝のうちに埋葬してしまったのか？」

「まだ空が明けきらないうちに、出発していったよ。」

「おまえさん、いったい何があったんだい、そんな浮かない顔をして？」

「べつに何もないさ。」

彼はそう言うと、あわててお椀を取り、私たちに豆乳をつごうとした。

その豆腐屋にすわって向かいの店をながめると、とても痛ましい気持ちになった。私はラッパ兵と少しの間すわっていたが、まもなくこの豆腐屋を出て、当地の女性のところへ賭けごとをしにいった。私たちはそこであの女が埋葬された場所を聞きだした。それは城内から一キロ離れた鰱魚荘（リェンユジュアン）というところだった。

どうしたわけか、私はあのラッパ兵の憂鬱な顔を見ると、無性に腹が立って、彼を殴り罵りたくなった。まるでこいつの浮かぬ顔が、あの娘に対する私のいちずな気持ちを侮辱しているように思われた。まるで彼の様子が、私のことをまったく侮辱しているかのようだった。私はどうにもこれ以上、彼と同じ卓で賭けごとをするのがいやになり、中隊に戻るとむしろの上に横になって眠ってしまった。

その夜、びっこはとうとう中隊に帰ってこなかった。彼は私に中隊に戻って寝たくないと言っていたので、彼はきっとあの女性のところで夜を過ごしたのだろうと思い、気にも留めなかった。翌日になっても、私はまだ外出する気にならず、ベッドでじっと横になっていた。午後になると少し熱が出てきて、体中具合が悪くなり、何も食べたり飲んだりしたくなくなった。生姜飴をなめ薬湯を飲んで、汗を出すために頭から布団をかぶったために、全身汗びっしょりで目が覚めたときには、もうすっかり日が暮れかかっていた。

私は起き上がり、本堂の裏へ行って小便をした。雨上がりの空に、夕日が建物の角に斜に懸かって、あたりを黄色く染めていた。空の薄雲は、落日によって色鮮やかに染められていた。こうした夕景色をながめ、人家の上にうっすらとたちのぼる炊事の煙を見やり、にわとりや犬の声、兵営のラッパの音を聞いているうちに、私たちが最初にここへ来た日におこったすべてのことを思いだしていた。私はこの友人の運命、そして私たちの生活の数々を思いだし、いささか茫然とし、悲哀を感じていた。一つの疑問符が私の心の中に隠されていた。この不可解な人生に対して、どのような解釈をすればいいのだろうか。私の考えはもちろん単純で、それほど複雑ではないといってよかった。

私はそれからまた戻って眠った。食事もしたくない、話もしたくない、考えることもしたくなかった。私はなおも眠りつづけた。どれだけの時間がたったかも知らず、ひたすら頭から布団をかぶっていた。二階で兵士が賭けごとをして騒ぐ声がかすかに聞こえ、朦朧とした中でいろいろな人に会い、そしてまた私たちは

すでに出発し、移動の途上にあり、目的地に着いたような気がした。過去のことが繰り返し私の記憶に侵入してきて、あのラッパ兵が倒れたときの表情が何度も目の前に現れた。目が覚めたとき、誰かが私のそばにすわっているような気がした。布団をはらいのけると、灯りはすでに消えており、本堂の大きなランプからこぼれてくる光によって、人影が一つ、私のそばにすわって動かずにいるのが映し出されているのだとわかった。

「びっこ、おまえか？」

「そうだ。」

「どうしてこんな時間に帰ってきた？」

彼は暗闇に顔を隠して、声をたてなかった。私は長いこと眠り、二度汗をかき、頭がぼんやりしており、いったいそのとき何時になっていたのかさえわからなかったので、彼にいま何時かと尋ねた。それでも彼は私の話が聞こえなかったかのように、ぴくりとも動かなかった。

しばらくして、彼はようやく言った。「兄貴、ほんとうにご先祖さまの霊験と、天のご加護のおかげで助かったよ。おれは見張り番の一発であやうく撃ち殺されるところだったんだ。」

「おまえ、合い言葉を知らないのか？」

「合い言葉なんか知るもんか。」

「もう十二時を過ぎてるんじゃないか？」

「わからん。」

「おまえ今夜はどこへ行って、こんなに遅くなったんだ？」

彼はまた何も言わなくなった。私は兵士たちが米桶の上に準備しておいてくれたモービル・ランプ[6]の灯が小さくしてあるのに気づいた。もっと明るくなるので、彼に灯を大きくしてもらおうとした。最初彼は動こうとしなかったので、私はもう一度、彼に頼んだ。

ランプの灯が大きくなってようやく、このラッパ兵が全身泥だらけで、ひどい格好をしているのが、はっきりと見えた。顔にはまるでついいましがた誰かと殴

[6]原文は「美孚燈」。ジョン・ロックフェラーがアメリカで興したスタンダード・オイル社製の灯油ランプ。「美孚」はモービルの音訳。

りあったかのように、あちこちにけがをした跡がはっきりとついていた。私は驚くとともに我が目を疑い、その友を見ながら、このまる一日いったいどこへ行って、何をしたのかを、どうやって尋ねればよいかわからずにいた。私の頭はそのときも実のところまだ多少ぼんやりしていた。ついさきほど朦朧とした中で、彼が石獅子から地面に転がり落ちる情景を夢に見たために、そのときもまだあたかも夢の中にいるかのようだった。

彼はそっと声をひそめて言った。「兄貴、兄貴、あの墓は、誰のしわざかわからないけど、掘りかえされたんだよ。」

「誰の墓だって？」

「掘られて間もないみたいだった。おれははっきりと見たんだ。」意固地な顔つきをした彼のことばを聞いて、私は彼の気が狂ってしまったのではないかと疑った。

「おい、おまえが言っているのは、誰の墓のことなんだ？　それはどこの墓のことで、どうしておまえが知っているんだ？」

「どうしてったって、おれは知ってるんだよ！　おれはあのおさげ髪が鰱魚荘（リェンユジュアン）に埋葬されたと聞いて、行って見たくなったのさ。昨日、一度行ったときは、大丈夫だった。今晩もう一度行ってみると、おれはその道をはっきりと覚えているんだぜ、あの墓は、どういうわけかもう誰かに掘りかえされていたんだ。」

もし私の気が狂ったのでなければ、きっとこの友人の気が狂ったのにちがいない。彼が言っているのは誰が埋葬されている墓のことなのか、私にはわかった。私は気がふれたように飛び上がった。「おまえ、彼女の墓に行ったのか？　彼女の墓に行ったんだな？　何てこと考えてるんだ？　この畜生め……」

この友は、ちっとも驚かずに、静かにひっそりと言った。「そうなんだ！　おれは彼女の墓へ行ったんだ。昨日も行って、今日も行った。おれは悪いことするような人間じゃないぞ！　天の神様に誓ってもいいが、おれは何も掘る道具など持っていってないぞ。おれが昨晩あの墓の盛り土を見たときは、上出来の土饅頭だったが、今晩はすっかり変わってしまっていた。誓ってもいいが、見たのはたしかに昨晩のあの墓だが、もとの様子とはすっかりちがっていたんだ。いったい誰がこんなことしでかして、誰が彼女を棺桶から引きずり出し、おぶっていったんだろう。」

私はこの恐ろしい報告を聞いて、突然ある人のことを思いだした。しかし、その人は私の心にちらっと浮かんで、すぐまた消えてしまったので、私は口に出さなかった。私には一つの疑問が浮かんだ。その女子は復活し、生き返ったために、棺桶からはいだして、いまはもしかするともう家に帰って彼女の父ちゃん母ちゃんと話でもしているのではあるまいか。私はこうも思った。彼女が死んだというのはうそで、そのためいいかげんに埋葬しておき、あとから別の人が彼女を掘り出し、彼女を救って逃がしたのではないだろうか。私はまたこうも思った。これはきっと私のこの友人の勘ちがいだ。精神が錯乱し、方角と場所を忘れて、一回目と二回目がちがうところだったために，このような誤解が生じたのだろう。私は様々な空想によって解釈して、こんなことはけっして事実ではないと考えようとした。

それから私は彼になぜ墓へ行ったのかと尋ねた。墓が掘りかえされたことについて彼がきっと何か知っているにちがいない、あるいは少なくとも事後にその主謀者が誰であったのか知っているはずだ、と私に疑われているのではないかと思って、彼はびくびくしていた。彼はたてつづけに七種類の誓いを立てて、いろんな神様に証人になってくださいとお願いしてから、女の屍を奪うつもりはなかったと弁解した。彼はひたすら、あらかじめ墓を掘るための鉄器を持っていくようなことはしていないと言い訳した。彼は懸命に彼の行為を弁解した。彼は言い終わると、私がとても暗い顔をしているのを見て、目に不安の色を浮かべた。もしそのとき、私が彼に対する信頼を示すことができなかったら、彼はきっと発狂して私を絞め殺していたことだろう。

私の病気は恐ろしさのあまりすっかり吹き飛んでしまい、私は今にも狂ってしまいそうな、またきっと狂ってしまうであろう友人を、どうやって落ち着かせるべきか考えていた。私はいろいろと別の話をして彼に説明してやったり、いろいろと荒唐無稽な物語をさがしだしたりして、その傷ついた心を慰めてやった。彼の血の気がだんだんとおさまり、一切の興奮が過ぎ去ったあとは、ぶつぶつと粗野なことばを言いつづけていた。彼は、たしかに自分はそのような想像をしたことがある、なぜなら金を飲んで死んだ人は、もし七日以内に男に抱かれさえすれば、生き返ると聞かされたからだ、と私に言った。彼は次のようにも言った。最初の日は、もし墓に着いて助けを求める声がしたら、義侠心を発揮して墓から人を救い出そうと想像していたにすぎなかった。次の日、彼はその話を聞いたため

にもう一度そこへ行き、助けを求める声がしなくても、女を掘り出すつもりだった。ところが、そこへ着いてみると、墓はもうすっかり変わりはてており、棺桶のふたは傍らにめくられ、からっぽの棺桶が大きな口を開けて人を食おうと待っていた。彼は棺桶の中に飛び込んでひとしきり見てみたが、数着の衣服以外には何もなかった。きっと少し前に誰かがそのことをしでかしたのだ。きっとそいつが墓をあばいて、女子の死体をおぶっていったにちがいない。

彼は自分の偽証をするために、もはや天の神様を持ちだすことをしなくなった。彼は誠実に、しかも細大漏らさず、過去のすべてを私に話した。私は彼の話を聞いて、彼を慰めるべきどんなことばも見つからなかった。私はこの出来事のことを、やはりどうしても信じられなかった。きっとみんな夢の中に身を置いていたにちがいないと、私は心中やはり思っていた。たとえ完全に夢を見ていたのではないとしても、明日の朝になれば、このラッパ兵はきっと今晩話したことを後悔するだろう、と私は思った。なぜならこのような欲望は誰も禁じることはできないが、それを実行することは人の道に外れることだから。彼が自分の行為を後悔して、口ふさぎのために私を殺すことさえやりかねない。私はそう考えて、思わず身がまえた。ところが、この人はいまや女性のように弱々しくなって、懺悔するほかは何もできなくなっていた。一つの問題が私たちの心をふさぐようになっていた。それは私たちがこれからこの出来事に対して、どのように対処するかということだった。ひとこと報告しに行くべきか、それともこの謎をそのままにしておくべきか？　二人の単純な知恵をしぼった短い相談の結果、この発見について私たちにはとやかくいう権利はない、夜が明けてから豆腐屋へ行って様子を見よう、ということになった。夜道を相当歩いたラッパ兵は、びっこの片足がすでに疲れ切っており、そのうえ戻ってきてから長いこと話したために、やがて眠ってしまった。私は昼間一日中寝ていたので、そのときどうしても眠ることができなかった。灯火のもとで、このかたわの苦しそうな顔、汚れた体を見つめながら、私は灯りを消して、この友のそばにすわって、夜が明けるのを待った。

豆腐屋に着いたのはもう早くない時間だったが、あの若い旦那は店を開けていなかった。昨夜ふと思ったあのことが、再び私の心にちらりと浮かんだ。戸は外からカギがかけてあったので、朝寝坊したり、家の中で何か事故が起きたのでないことは明らかだった。私の想像がもしかすると事実になろうとしている。私は恐ろしくなって、ラッパ兵を引っ張って中隊に戻り、私のその推測を一度は大そ

れた野心を抱いた彼に話した。彼は必ずしもそのとおりだとは信じようとせずに、また一人でしばらく出かけてしまった。戻ってきたとき、顔はくすんだ白色をしており、よそのある人から聞きだした話によって、あの旦那はまちがいなく昨日の夜、店を出ていったことがわかった、と言った。

三日間、私たちは恐くて外出もせずに、むしろにすわって骨牌[7]ばかりしていた。その後、大隊の中にあるうわさが伝わった。そのうわさは目に見えない羽が生えて、あっという間に全大隊に知れわたった。「商工会長の娘は、新しい墓に埋められるとすぐに掘りかえされ、死骸は誰かに盗まれてしまった。」もう一つのうわさは次のようなものだった。「その少女の死骸は、墓から数百メートル離れた洞窟で誰かに発見された。一糸まとわぬ姿で洞窟の中の石床に寝かされ、地面と身体の上にはびっしりと青い野菊がしきつめられていた。」

その知らせは人々の無知な枝葉が付け加えられて、猥褻ではなくなり神秘なものとなった。

私たちはその知らせを聞いてあっけにとられた。私たちは私たちのあの友人がどんなことをしたのか知った。

その後、私たちはもう二度とあの豆腐屋へ行き、長いこしかけにすわって、あの若い友が作った豆乳を飲むことはなかったし、もう二度とあの若くて誠実な友人に会うこともなかった。私の同郷のあのびっこについていえば、彼はいまもなお第四十七中隊のラッパ兵で、彼の足はびっこのままだ。だが、彼はこの事件のことを誰にも話したことはない。彼は罪を犯したことはないが、別の一人の行為が、彼を一生鬱々として楽しまない人間にした。私については、まだ何か言いたいことがあるかって？ ……私はいくぶん憂鬱で、若い人といっしょにやっていけない性格になり、軍隊の中にうまくとけこめなくなったため、都会にやってきた。だが都会にもなじめず、これからどこへ行けばよいかわからずにいる。私はいつも過去のあのことを思い出すために、たえず落ち着かないのだ。人にはそれぞれの運命があることを、私は知っている。過ぎ去ったいくつかのことが永遠に私の心から離れない。私がそれを語ると、あなたたちはそれは物語だと思う。一人の人間が生活の中でこのような物語百個あまりに押さえつけられたとき、その人はどのような気持ちで日々を過ごすことになるのか、誰も理解してはくれないのだ。

---

[7]二つのさいの目を組み合わせた32枚のパイを使う中国式ドミノ。

# 湘西

第5号

2003年

沈従文研究